

キツネとリスの都ロンドン



一航 昨年4月に英国に着任し、ロンドン北部の集合住宅に入居した最初の日、まず驚いたのがキツネだった。庭の物置の上に2匹のキツネがいて、じつとこちらを見ている。まったく人間を警戒する気配がないのだ。

あれから一年以上たつが、今もこの町のキツネの数には驚く。市内には推定1万匹が生息。英国のキツネ愛護団体「フォックス・プロジェクト」創設者のトレバー・ウィリアムズ氏に昨年、キツネが多い理由を聞くと、「1940～50年代にはまだ田舎だった地域が、ロンドンの住宅拡張によって『ロンドン郊外』となり、キツネがすみやすい環境となりました」との答えが返ってきた。キツネは雑食性で、虫や野ネズミのほか、人間が生ゴミとして出す残飯も喜んで食べる。このため緑が多いロンドンの首都圏が広がって人口が増えるにつれ、キツネにとっては餌が豊富なゴミ箱をあさる機会も増え、暮らしやすくなったらしい。

一方、この1年でもう一つ驚いたのが、リスが異常に多いことだ。英国で今、問題になっているのは、19

世紀ごろに北米から持ち込まれたトウブハイイロリス。繁殖力が強く、現在は英全土で270万匹が生息しているが、英国の在来種のキタリスは14万匹程度で、保護団体は絶滅を懸念している。

リスは樹皮をはぎ、木を枯らしてしまつたため、木材業者らの脅威となっている。英王立林業協会は2021年、リスによる被害額について、木材価値の損失などで年間370万ポンド（約63億円）に上ると発表した。英政府は19年、トウブハイイロリスを「侵略的外来種」に指定し、捕まえた場合は再び野生に放すことを禁じた。

人口約900万人のロンドンには欧州有数の大都市だが、英メディアによると、面積の40%以上は緑地という。約3000の公園もあり、動物たちにはすみやすい環境なのは確かだ。

動物に慣れたら「あなたもロンドンナー（ロンドン市民）です」と大家に言われたことがある。だが今なお、道で目の前を突然シュッと横切るキツネや、足元に飛び出してくるリスには腰を抜かすほど驚く。まだまだ動物たちの突然の登場には慣れない。住み始めて1年。ロンドンナーへの道は遠い。